



Title	直示と参照に基づく日本語指示詞の再検討
Author(s)	山下, 好孝
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 23, 51-62
Issue Date	2016-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62975
Type	departmental bulletin paper
File Information	51_Yamashita.pdf



直示と参照に基づく 日本語指示詞の再検討

北海道大学国際本部グローバル教育推進センター 教授

山下 好孝

Reanalysis of Japanese Demonstratives from Deictic or Contextual Point of View

YAMASHITA Yoshitaka

abstract

It has been said that Japanese directional expressions MIGI (right) and HIDARI (left), and demonstratives (KORE, SORE, ARE, etc.) are deictic, because their use is based on the speaker's viewpoint. But according to my research in cooperation with Japanese students, MIGI and HIDARI have not only deictic but also contextual use. Here the contextual use means that one expression is based on a reference point in order to be understood appropriately.

In this article I claim that to analyze the Japanese demonstratives the two viewpoints are necessary: deictic and contextual ones. KORE and ARE expressions are deictic and SORE expressions are contextual. For SORE expressions to be used the following three types of viewpoints are indispensable.

- 1) Action of pointing to object referred to by SORE
- 2) Presence of hearer or hearer's supposition in conversation
- 3) Anaphora in discourse

1 はじめに

言語学者の安井稔氏は直示に関して次のように述べている。

- 1) 話し手を中心として決まってくる直示体系 (deixis) には、上で触れた「ここ」、「いま」のほか、「これ」、「それ」、「あれ」、「こっち」、「そっち」、「あっち」なども含まれる。以上のほか、特に注意を要するのは、「右」「左」という方向を表す語であろう。

安井 (2010 : 38)

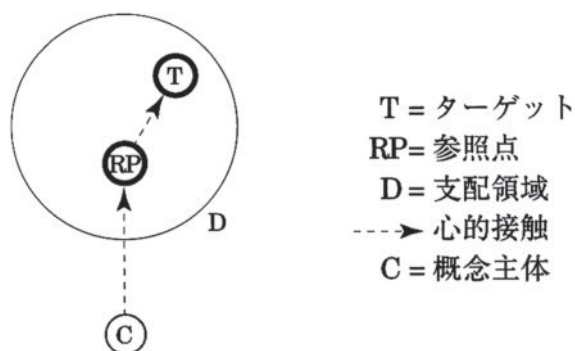
そして「右、左」を次のように定義している。

- 2) すなわち、自分を時計の文字盤の中心に置いたとする。そこで顔を12時のほうに向け、両腕を真横に上げる。すると、12時から、3時を指している腕までの間が右、9時までの間が左ということになる。

安井 (2010 : 39)

しかし、実際の「右、左」の使用を見ると上記の安井氏の説明ほど単純なものではない。以下の節で見るように、「右、左」の使用では、話し手を中心にした直示ではなく、他のものを基準とした使用が見られるのである。本稿は話し手を中心とした表現を直示と呼ぶが、他の基準を中心とした表現を参照(reference)と呼ぶことにする。そしてその基準となるものを参照点(reference point)と呼ぶ。これは認知言語学でも以下のような図をもって説明されている。

図1



辻編 (2013 : 132)

本稿は、さらに直示表現と参照表現が日本語の指示詞にも見られることを示す。そして様々な言語現象にこれらの表現の違いが認められることを示唆する。

2 「右、左」と直示、参照

本節では実際の例に基づいて「右」「左」の用法を見ていく。まず図2の位置関係を見てみよう

■図2 牛乳、コーヒー



筆者が担当する北海道大学の講義の中で、これらの位置関係を出席した学生に答えてもらった。数枚の絵を見せて、ある物が「右にあるか」「左にあるか」答えてもらったのである。全回答者数は143名だが、中にはどちらの答えも可能だとするものもいた。その場合、「右」と「左」の両方にカウントした。さて図2の写真だが、全員が「牛乳は左」と答えている。つまり話者から見た直示表現として、牛乳は左にあると解釈しているのである。

■図3 牛乳と正面を向いた男性



図3の写真で「牛乳は男の人の左にある」と答えたのは83名、「牛乳は男の

人の右にある」と答えたのは69名であった。つまり話者を中心とする直示の解釈をした者と、男の人を基準点として、その男の人の「右手」と答えた者が存在するということである。このことは、上の節で述べた安井（2010）の記述が正確ではないことを物語る。「右、左」は話者から見た直示表現であるとともに、ある参照点が設定されると、その参照点から見た参照表現でもあるのである。

■図4 牛乳とよそ見をしている男性



図4を見ると「牛乳は男の人の右にある」と答えた者の数が若干減った（62名）。すなわち男の人と牛乳の関係が希薄になり、男の人が参照点になりにくくなっていると考えられるのである。その一方で直示的な表現で「牛乳は男の人の左にある」と答えた学生の人数は89名であった。いずれにせよ、このようなシチュエーションでは直示的な見方も、参照的な見方も可能だということである。

■図5 牛乳と後ろ向きの男性



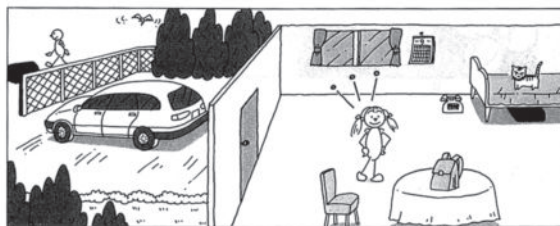
図5では全員が「男の人の左に牛乳がある」と答えている。話者から見た直示としても男の人を参照点としてみても、どちらも「左」に牛乳があるこ

とになるからだと考えられる。

以上の観察から、日本語で「右、左」は直示的な見方と、参照的な見方の2つの可能性があることが分かった。逆に言うと、どちらの見方で「右左」を決定するかが明快でない場合があるということである。その一つの証拠に、ある日本語教科書の右左に関する練習問題を取り上げてみる。

■図6 みんなの日本語初級Ⅰ 旧版

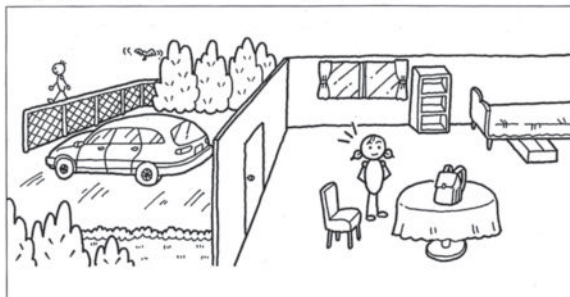
3. 例: テーブルの ^{うへ}上・何 ^{なに} → テーブルの ^{うへ}上に ^{なに}何が ありますか。
かばんが あります。
- 1) ベッドの ^{した}下・何 ^{なに} → 2) 部屋・だれ →
 3) 窓の ^{ひだり}左・何 ^{なに} → 4) 庭・だれ →



日本語教科書『みんなの日本語初級Ⅰ』旧版のテキストの練習問題3-3)は、日本人母語話者に見せると、奇異に感じる者が大半であった。問題作成者の意図としては「窓」を参照点とした参照表現として出題したのであろう。その場合は「窓の左にカレンダーがあります」という答えになる。しかしながら、多くの日本語話者にとって動かない物体としての「窓」は参照点になりにくく、参照点を欠く場合には直示の見方で「右、左」を考える。そのため、「窓の左には何も無い」ことになる。

■図7 みんなの日本語初級Ⅰ 新版

3. 例: テーブルの ^{うへ}上・何 ^{なに} → テーブルの ^{うへ}上に ^{なに}何が ありますか。
かばんが あります。
- 1) ベッドの ^{した}下・何 ^{なに} → 2) 部屋・だれ →
 3) 窓の ^{みぎ}右・何 ^{なに} → 4) 庭・だれ →



一方『みんなの日本語初級1』の新版では「窓の右に何がありますか」という問題に変更されている。「右、左」を直示表現と見るなら、話者から「向かって右」にあるものを問われているので「窓の右に棚があります」という答えが導かれるのである。

3 前、後ろ、横、側（そば）

では「前、後ろ」という位置を表す表現では、直示表現と参照表現のどちらが使われるのだろうか。前節と同様に北海道大学の学生に行った調査をもとに考察していく。

■ 図8 男性とコーヒー



■ 図9 男性とテレビ



図8では「男の人の前にコーヒーがある」という表現が普通である。筆者が行った調査でも全員がそのように答えている。「前、後ろ、横、側（そば）」等の場所を表す言葉は、話者からの直示表現ではなく、ある参照点を経由して場所を特定する参照表現である。この場合、「男の人」が参照点となり、「その参照点の前」にコーヒーがあるということになる。

では図9を見てみよう。筆者が行った調査では143名中36名が以下の二通りの表現が可能であるとした。

- 3) 男の人の後ろにテレビがある。
- 4) テレビの前に男の人がいる。

このことは何を意味するのであろうか。図9には「テレビ」と「男の人」の姿が映されている。そこでは、参照点として「男の人」と「テレビ」の両方が選ばれうるということである。ところが、先ほどの図8で次のように表現することは不自然である。

- 5) *コーヒーの後ろに男の人がいる。

つまり図8では「男の人」は参照点になるが、「コーヒー」はなりえないのである。別の言い方をすると「参照点」になりうるためには、ある程度「目立つ」ものでなければならないということだ。図8の「コーヒー」では小さすぎて参照点になる資質を欠く。

ラネカー（2011：109）においても、「位置づけることが困難なものの特定を助けるために、知覚的に際立っているものを参照点として、聞き手の注意をそこに向けさせることがある」との指摘があり、次のような例が挙げられている。

- [25] a. Do you see that boat out there in the lake? There's a duck swimming right next to it.
b. Do you remember that surgeon we met at the party? His wife just filed for divorce.

[25a] では聞き手の注意は最終的には「アヒル」に向けられることになる。しかし「アヒル」より「ボート」の方が見つけやすいため、まず見つけやすい「ボート」を位置づけた上で「アヒル」に言及している。

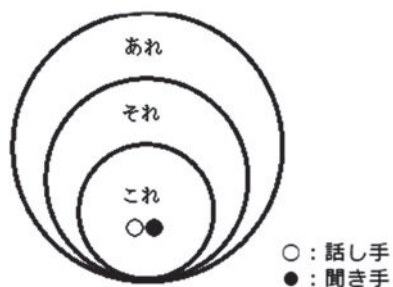
前節の図2に戻ると、「牛乳はコーヒーの左にある」とも「コーヒーは牛乳の右にある」ということも出来る。この場合、直示表現の補強として基準点が表されていると考えられる。しかし、参照表現の参照点になるほど「目立つ」ものがない場合は、参照表現にはならず直示表現が採用されるのであろう。

4 「こそあ」と直示、参照

最初に安井（2010）が挙げた直示表現の中には「ここ、そこ、あそこ」などのいわゆる指示詞の表現が含まれていた。日本語の指示詞をめぐるのは、膨大な量の研究論文が存在する。本節では日本語の指示詞も直示型のものと参照型のものがあることを示す。

日本語の指示詞にはさまざまな解釈がある。まず「近称、中称、遠称」という考え方を取り上げる。この考え方は、話者の近くにあるものを「これ」、話者の遠くにあるものを「あれ」、その中間にあるものを「それ」で指すという考え方である。図10でそれを図示する。

■図10 近称、中称、遠称



しかしながら、この考え方は図11のような状況では成り立たないことがわかる。汽車に乗り、車窓の向こうにアルプスが見えたとする。

- 6) ああ、これがアルプスか。
- 7) ああ、あれがアルプスか

■図11 汽車の車窓



図11のような状況下では6) 7) のような表現が可能である。話者が雄大なアルプスを間近に感じた場合は「これ」、遠くに感じた場合は「あれ」が用いられる。ところが、この状況では「それ」は使われない。近くでも遠くでもない位置にあるものは「それ」で指すという主張も見られるが、平田 (2014) 等の研究によって否定されている。

平田 (2014) は実際の指示詞の使用の観察から、「それ」系の指示詞には「指差し」のような行為が伴うことを指摘している。平田 (2014) は「それ」のもつ「注意概念」という考えを導入し、「それ」が「あれ」と共起する場合をあげている。

8) ゼブラ柄のビル

(女性2人が展望台の窓の前の隣り合ったいすに座り、正面に広がる景色を見ている。Aは共通の友人が住んでいるビルの場所をBに教えようとする。)

A: (指さしをしながら) あそこ見て。斜めに森あるでしょ。

B: (Aの指さしに合わせて顔を動かす)

A: そこの裏! 白黒のゼブラ柄のビル。ゼブラ柄の。

B: え、どれ、どれ? (指さしをしながら) あの鉄塔が近いやつ?

A: (Bの方を見た後、正面に顔を戻し指さし) それ! それ!

白と黒…黒じゃないな、グレーの。Bのまっすぐ前。

B: あー、あれ…かなあ

A: (Bの方を見て) そうそう。(顔を正面に戻し) ねずみ色のやつ。

それがCちゃん住んでるんだよね。

平田 (2014 : 218-219)

図11に於いても、指差しを伴えば「そ」系指示詞の使用は可能になる。

9) ねえ、そこ見て (指差しながら)。それがアルプスなんだよ。

直示と参照という考え方から再解釈してみよう。「こ」系指示詞と「あ」系指示詞は話者から見て近くにあるか、遠くにあるかで使い分けられる直示表現である。「こ」系指示詞と「あ」系指示詞は場所だけでなく時間に関しても使い分けを有する。過去のことであれば「あ」、現在に近い時間であれば「こ」が使われる。いずれにせよ「こ」と「あ」は、話者を基準とする直示表現と言える。

それに対して「そ」系指示詞は「指差し」等の参照点が必要な表現である。また、後に見るように「そ」系指示詞の時間表現に関しては、先行文脈にあらわれた時間との照応関係が必要になり、先行文脈に現れた時間が「参照点」となる。そして「参照点」になる時間は、過去でも未来でもよい。

さらに、「そ」系指示詞に関しては、会話における聞き手の存在が問題になる。すなわち「話し手」と「聞き手」の会話に於いて、「話し手」の領域にあるものは「これ」、「聞き手」の領域にあるものは「それ」で指すというルールが存在する。

10) A: それ、何ですか?

B: これですか。スペイン語の辞書です。

また会話に於いて「聞き手」が知っているが、「話し手」が知らない事柄の場合、「そ」系指示詞が用いられる。

11) A: ぼくの友達に山田というのがいてね。

B: その人、(*あの人)、函館の人ですか?

ところが「話し手」が知っていて、「聞き手」が知らない事柄の場合、「そ」系と「あ」系が混在する場合がある。

12) A: ぼくの友達に山田というのがいてね。

B: その人、函館の人ですか？

A: そいつ（あいつ）は函館じゃなかったと思う。

このことから会話の中の「そ」系指示詞は「聞き手」を参照点とする参照表現と言えないだろうか。「こ」系指示詞と「あ」系指示詞は直示であるため、その情報は参照点を必要とせず、話者がダイレクトにアクセスできる。「そ系」指示詞は参照表現であるため、情報にアクセスするのに必ず参照点を必要とする。会話の場合、「聞き手」がその参照点となっているのである。

さらに、「あ」系指示詞が使われる場合、回想的な意味合いが出る。書籍などの書き言葉で「あ」系指示詞が使われる場合はまれだが、使われる場合は回想的な意味合いで使われる。それに対し、「そ」系指示詞は文脈指示の用法で、先行文脈に「そ」系指示詞と照応関係にある語句が用いられていなければならない。

また、直示としての「あ」系指示詞と「こ」系指示詞は情報にダイレクトにアクセスできない場合は使用不可となる。

13) カルロス4世とその家族

これはスペインの画家ゴヤの有名な絵画の題名である。もしこの語句を発話するものが「カルロス4世の家族」と知り合いであったり、その家族のことをよく知っているとすると「あ」系指示詞が使用可能になるであろう。しかしそのような状況は考えにくい。またこの例で使われている「その」には所有の意味も含意される。この意味は「あ」系指示詞と「こ」系指示詞には存在しない。

また、対話における「そ」系指示詞に関して次のような例が特異なものとしてよく挙げられてきた。

14) A: お出かけですか？

B: ええ、ちょっとそこ（*ここ、*あそこ）まで。

15) A: すてきなノートね。どこで買ったの？

B: そのへんでどこでも売ってるよ。

後者の例で「このへん」「あのへん」という表現も使用可能であるが、意味合いが異なる。「このへん」だと直示表現として会話の場の近くを意味し、「あのへん」だと会話の場から離れているが、「話し手」「聞き手」の両者がすぐ知覚できる場所を示さなければならない。この場合、指差し等のジェスチャーが伴うことが多い。指差し等が伴えば参照表現として「そのへん」も使用可

能になるが、例文の「そのへん」はそのような意味合いはない。

このような会話に独特な「そ」系指示詞はどのように解釈すればよいだろうか。筆者は「聞き手の考えうること」を参照点とする参照表現であると考ええる。たとえば「お出かけですか」という質問には、「郵便局とか、買い物とか、なんか用があつて出かけるのだろう」という考えがあるはずだ。答える方も「あなたの考えているような用事をしに行くんです」という曖昧な答えを返している。

同様の例として次のような会話も考えられる。

16) (タクシーの運転手がお客に)

運転手：そろそろ札幌駅ですけど、どのへんで止めましょうか？

客：そのへんで止めてください。

17) A：タイはどうだった？

B：それほど暑くなかった。

前者の会話で「そのへん」という語句に指差しのようなジェスチャーが伴えば、指差した地点を参照点とする表現になる。ところがこの例では、札幌駅の近くならどこでもいいという考えがあるため、「運転手さんが適当だと思うところならどこでも」という意味合いになる。

後者の会話では「タイはどうだった」という問いに対し、「あなた（もしくはあなたを含む私達）が考えていたほど暑くはなかった」という答えをしているのであろう。つまり、「聞き手の領域、聞き手の考え」を参照点とする表現として「そ」系指示詞が使われているのである。

次に、従来から主張されている「こ、そ、あ」の文脈指示の用法にも触れておく。

18) 1945年8月6日、この日／その日／あの日 から原子力の持つ意味が変わった。

この文における「こ」系指示詞、「そ」系指示詞、「あ」系指示詞をすべて文脈指示として一括する考え方もあるが、本稿のこれまでの議論を元にして別の解釈を提示する。

19) 「この日」：直前にある「1945年8月6日」という日付を指す直示表現

「その日」：先行文脈にある日付と照応する参照表現

「あの日」：書き手（もしくは話し手）と読み手（もしくは聞き手）からダイレクトにアクセスできる既知の情報としての直示表現

以上、日本語の指示詞の解釈に関して、「直示」と「参照」という考え方からの再解釈を示した。この考えに基づく従来「あいまいな『そ』系指示詞」と言われるものも、他の参照表現と同等に処理できることを示した。

5 結語

本稿は方向を示す「右、左」、場所を表す「前、後ろ、横、側（そば）」、そして日本語の指示詞体系を直示と参照という考え方で再分析してきた。

直示は「話者」「今」「ここ」という観点から表現したものである。一方、参照はいったんなんらかの参照点を經由して表現する方法である。

ここで扱った項目だけではなく、直示と参照という考え方でさまざまな言語現象が理解可能となる。たとえば時制（tense）はおそらく、直示表現であろう。それに対し相（aspect）は参照表現であることは直感的に理解できるのではないだろうか。また「話者」「今」「ここ」を基準とする表現にはモダリティーがある。直示と参照は、さまざまな理論的展開が可能な概念であると考えている。

参考文献

- 辻幸夫編（2013）『新編認知言語学キーワード事典』研究社
平田未季（2014）「注意概念を用いたソ系の分析と談話管理理論」、『国際広報メディア・観光ジャーナル18』213-229
安井稔（2010）『「そうだったのか」の言語学』、開拓社
ラネカー、ロナルド・W（2011）『認知文法論序説』、山梨正明監訳、研究社

（平成28年4月25日受理、平成28年7月14日採択）